

出生力の低下をもたらす諸要因の考察*

倉 田 和 四 生**

はじめに

- (1) 戦後日本の出生力の動向
- (2) 出生力の低下をもたらす諸要因
- (3) 出生力低下の社会・経済的影響
- (4) 「少子社会は恐くない」
- (5) 「女が子どもを生まない本当の理由」
- (6) 出生力の規定要因
むすび——「子どもは3人」のすすめ

はじめに

今日、日本の人口の高齢化は社会的、経済的側面にきわめて重要な影響を与えるようになって来た。高齢者医療費の急増、年金制度の財政的困難、高齢者福祉サービス需要の急増などきわめて深刻な事態が予想されている。

ところで人口の高齢化とは人口の中で高齢者の割合が増大することであり、逆に、若年者の割合が減少することでもある。いわゆる少子社会が実現している。「人口の置き換え水準の出生力」は合計特殊出生率で2.08であるとされているのに対して日本のそれは1.39（平成9年）にまで低下している。日本ではこの置き換え水準を下廻る状態がすでに20年も続いているのである。

高齢社会と少子社会は実は共通の原因から生まれる二つの側面である。すなわち出生力の低さとその持続が少子社会と同時に高齢社会を生み出している主な原因であることは言うまでもない事実である¹⁾。

19世紀末のヨーロッパ諸国の出生力の低下を考察してイタリアのジニ（Corado Gini）は循環的興亡説を説いた。社会階層には各層毎の出生力の違いがあり、これによって階層間の周流が生まれる。これを彼は「社会的新陳代謝」と呼んでいる。

彼によると、国民人口はこの「社会的新陳代謝」の強さに応じて三つの段階をたどって興亡すると考えられる。第1の段階は「青春と拡大」の段階である。この段階では国民の出生力は強く、社会階層も未分化で、社会的新陳代謝も生じない。しかし次第に社会的な分化がみられるようになり、上層階級と下層階級とに分化するが、この段階では上層階級の出生力も強いので下層階級から上昇する必要はない。下層階級の強い出生力によって生み出される過剰人口はしばしば「移民」として流出したり、場合によっては戦争をひきおこす。

社会が複雑化し文化が発達するにしたがって次第に支配機構が増大していくにもかかわらず、支配層の出生力は次第に弱まっていくため、下層から大量の優質人口を補充する必要に迫られる。ここに人口の周流が生まれる。ところが下層階級も移民や戦争によって出生力の強い人口を失うため次第にその出生力が減退しはじめる。これが第2の「成熟期段階」である。

これについて第3の「老齢期」がやって来る。この段階では上層階級の出生力はますます衰え、下層階級も上昇しようとして出産を制限する。そこで上層階級の支配に必要な優質人口を下層から補給することが不可能になり、異常な新陳代謝がおこる。都市化はこれに拍車をかける。国民はバ

*キーワード：高齢社会、合計特殊出生率、豊かな社会

**関西学院大学名誉教授

1) 高齢化をすすめる要因には死亡率の低下と出生率の低下がともに影響しているが、その中で大きな役割を果たすのは出生力の低下である。